
ラバラーゼ

あそうリネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラバラーゼ

【Zコード】

Z5211D

【作者名】

あそくりね

【あらすじ】

過去や未来、様々な思惑が絡まりあつ。

人々の歓声が聴こえる。

城の門が開かれると、城下町にはたくさんの観衆が見えた。
数十人の兵士が観衆に囲まれた道を先に行き、それに続いてジョン
シャンも一步を踏み出した。

美しい顔、しなやかな体、艶やかな身のこなし、豪華な衣装。

彼女は手を振りながら観衆に微笑みかけた。

観衆は彼女に心を奪われると同時に嫉妬する。
そしてそれは観衆のみならず、城内の者達にも通ずる感情だった。

「ジョンシャンさまあ」

一人の小さな女の子がジョンシャンの元にてちてちと歩み寄つて來
たが、兵士に止められ、その拍子にこけてしまった。

「あら。大丈夫?」

ジョンシャンはその女の子に近寄り、彼女を起しそうと屈んだ。

その時だった。

硝煙の香り。

ジョン・シャンが後ろを振り替えると、一メートルも離れていない場所に銃弾の痕があった。

キヤーー キヤーー キヤーー

あちりーひりで悲鳴が聞こえた。

「時計台から音がしたぞ！」

「ジョン・シャン様は無事か！？」

「ミス・ジョン・シャン、さあ城に避難しましょ！」

ジョン・シャンは何がなんだかわからないまま従者や兵士に守られながら城へ帰った。

「 チツ 」

まさか失敗するなんて。

男は銃をおろし、時計台からすぐさま脱出した。

城の兵士達が時計台へどゾロゾロとやって来たが、既にそこには男は居なかつた。

男の名はトニー・ペオニー。職業は『なんでも屋』だ。
人殺しだらうが引つ越しの手伝いだらうが金さえ払えれば何だつてやるのだ。

そんなトニーのもとにあるロジョンシャン暗殺の依頼が入つた。

「ジョンシャンってあの呪術師の?」

「ああ、そうだ」

依頼主がしわがれた声で返事をした。

「お前は異国の出身だらう? 奴を殺すことにして躊躇いは感じんだらう

？」

この国に生まれ育った人間は、ジョンシャンに通つてゐる血を異常なまでに崇めていた。

人殺しを生業にしている者でも、呪術師を殺すことには決して同意しなかつた。

「多分、異国出身者でも『人殺し』に嫌悪感を示す奴は捨てるほどいるぜ」

トニーは顔に微かに笑みを浮かべながら言つた。

「ま、俺はジョンシャンだらうがなんだらうが殺るけどな」

「君に依頼して正解だつた」

そこで依頼主は大きな包みを差し出した。

「代金は前払いだつたよね？」

トニーは包みの中身を確認した。思わず息が漏れた。

「俺の撃では、失敗しても代金は返さないことになつてんだけど、それは分かつてるか？」

「ああ、もちろんだ」

その時、依頼主の目が微かに揺れた。

トニーは失敗したら今度は自分が標的になるだらうことを悟った。
また、今この依頼を断つても同じことになることを悟った。

ま、失敗しなかつたら良いんだよな。

「じゃあ、最善を尽しますよ」

此ノ世ハ闇ガ支配スル。

御前ノ右手ハ其ノ為ニ在ル。

我ノ統ベル世ガ訪レル日ヲ、御前モ望ンデイルノダロウ？

ある時、緋色の田をした赤ん坊がとある夫婦の元に産まれた。

夫婦は息子の変わった田の色に少し戸惑つたが、息子の誕生を抱き合つて喜んだ。

夫婦は幸せだった。そしてこれからも幸せが続くと思つていた。

しかし、彼らの幸せの根源が彼らから幸せを奪つてしまつた。

彼らの息子の右手が、一瞬にして彼らの命を奪つてしまつた。

彼の右手がこの世に誕生することによつて生じたエネルギーが暴発してしまつたのだ。

まだ産まれたばかりの彼に、この右手の力を制御することはできなかつた。

御前ノ右手ハ我ノ道具。

御前自身モ我ノ道具也。

御前ハ我ニ從ウヨリ他ハ無イノダ。

……。

「ナーシサス」

「なあに?」

「俺、寝てたのか」

「ええ、ぐつすり、ね」

ナーシサスはクスッと笑った。

「「」のん」

「良いのよサルビア。あなたは毎日コスモス様と『秘密の特訓』をして疲れているんでしょう?」「

「……いや、あんなのたいしたことない

「ホント強がりなんだから」

またナーシサスはクスッと笑った。

「ホントに疲れてなんかないよー元気だ!」

「それはさつき寝てたからでしょ?」「

「……」

「じゅりじゅる、もうそろそろ夕飯だわ。行きましょ!」

「おお。…………といひで書庫の整理は

「サルビアが寝ていた間に終わらせたわよ」

「悪い

「ツケーねーほら、行くわよ

「IJの国内にジョン・シャン様のお命を狙つ輩が居るなんて……」

大臣が力なく呟いた。

「しかし、『無事でなによりです』

「……や、ね」

ジョン・シャンは微笑を造った。

『自分の命が狙われた』

そのことに彼女はかなり動搖していた。怖かった。震えが止まらない
かった。

「ジョン・シャン様。あなたは充分分かつてらっしゃると思いますが、
今回のこととはおそらく、いえ、確実に異国の者の仕業でしょう」

大臣はここで一度言葉を切った。

そしてジョン・シャンの肩に両手を乗せて、ゆっくりと聞こ聞かせる
ように言った。

「分かりますな。これ以上サルビアについて調べるのはやめ下さ
い」

ジョン・シャンは一瞬はつとめて、そしてキッと大臣を睨んだ。

「それとこれと何の関係があるのです!」

「あなたは聴い方だ。お分かりになつてこらねばねだ」

ジョン・シャンは大臣の手をふりほどいた。

「分かりません…全然分かりません…」

大臣は大きく、わざとかと思えるくらいのため息をついた。

「御両親に似て頑固でいらっしゃる」

「……父や母の為にも、サルビアについて知らなければならぬのよ

ジョン・シャンは相変わらず震えていたが、それは恐怖の震えではなく、怒りの震えだった。

「あなたは勘違いをしていらっしゃる。私共があなたに話したことがないのです。それが真実なのです」

「そんなはずあつません…納得できません…」

「真実がいつも納得できるものだとでもお思いなのですか?」

大臣がニヤリとこう擬音が似合つよつた笑みを浮かべた。

「あなたはまだまだ子供なのですね」

「………」

ジョン・シャンは拳を握り締めた。

・・・・・。Jの国に留まるのはもうやめるべきだな。

トニー・ピオーは執拗なまでに自身を嗅ぎ回る例の依頼者連中から逃げ回りながら、そのようなことを考えていた。

いつの間にか同業者にまでジョン・シャン暗殺未遂を犯したのが自身だと知れ渡っていた。

そつなつて来ると、自身の隠れる場所も限られるし、逃げ場もないも同然だ。

だからいつそ、故郷に帰ろうかと考えた。

もつ自分も子供ではなく、ある程度の生きる為の力はある。

だからもつ故郷に帰つても大丈夫だつ。

それに、この国からの追手をまくには、あの国しかない。

ヘーリコ帝国しかない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5211d/>

ラバラーゼ

2011年1月12日15時20分発行